

大日本帝國の搖ぎなき御柱となりし靈に心からなる祈を捧げた。
海行かば水漬く屍 山行かば草むすしかばね
大君の邊にこそ死なめ のどには死なじ

明治神宮

明治天皇の御遺徳を慕ひまつりて参拜する人々の絶え間なき 明治神宮に参拜しました。
自然に身の引締る内にも宏大無邊限りなき 御聖徳に包容せらるゝ様であります。

御製

さかしきもおろかもあれど人ごとに
もたまほしきは誠なりけり

明治神宮参拜が終つてから解散。

歸番は○時迄泊番は何日もの通と云ひ渡された。

浅草に行くもの、三越に遊ぶもの思ひくである。日頃心の合つてゐる吾々の班は東京見學の有効な豫定を協議した。

- 一、上野動物園

- 一、博物館
- 一、浅草
- 一、三越
- 一、泉岳寺
- 一、歸横

子孫の爲めには美田を買はずとの名詩を残した大西郷も城山の露と消えて今茲に草履ばきの巨體に犬を連れて上野の山から大東京を見下ろして居られる。

小學校時代に聞いた關東大震災を目の下に見て廢墟と化して十餘年後の近代都市として復興させた東京市民の熱と根氣と努力にはあの太き眉を動かされたことであらう？。

動物園

初めて見る動物の名や鳥の名札と見較べながら一巡する動物園の廣さ規模の宏大さには驚きの目を見張るより外はない。

毎日出入する幾萬の人を相手に柵の中に一生を終るであらう動物達を我が子の様に愛する掛の人々の勞苦は並大低ではあるまい。

彼の犖猛な獅子や虎等も心から愛する慈愛の手には温和な動物に過ぎないものださうだ。
感化の力程偉大なものはあるまい……

御 製

いつくしみあまねかりせばもろこしの

野にふす虎もなつかざらめや

鬼神を泣かすると仰せられた「誠」程尊いものはない。

日本海々戦當時の記事を見る時は敵と戦ふ時は鬼をも拉ぐ^{ヒシ}氣慨となり敵艦の溺者を救ひ看護するときは肉身も及ばぬ看護の手をさしのべた先輩の氣持こそ尊い軍人精神の發露である。

動物の人気者は何處に行つても猿であらう。滑稽味たつぶりの顔——機敏な動作……

大人迄が遂ひ時間を忘れて見入る。

小學時代に歌つた桃太郎の童話の猿……

さうだ桃太郎の童話は有名である。

桃太郎には親はない。

獨立獨歩である。

人でなしの鬼を征服に出かける。正義の力である。

腰に付けたきび團子は質素にして且つ榮養價値に富んだ兵糧である。

慾深き犬猜疑心の強き猿、我が子の爲焼野に身を焼く雉の三者の各々異なる性質を良く使ひつけた智慧、味方に數倍する敵を征服した勇氣——鬼より捕獲せる寶物は公平に分配した公平無私——桃太郎こそ天晴れ人の世の模範たるものである。

博 物 館

時代々に區劃せられた各室を一巡する。幾千年を経た古代の風物——餘りにも現代とかけ離れたものである。

奈良朝時代の文化——その優れた美術など日本にのみもつ誇りである。

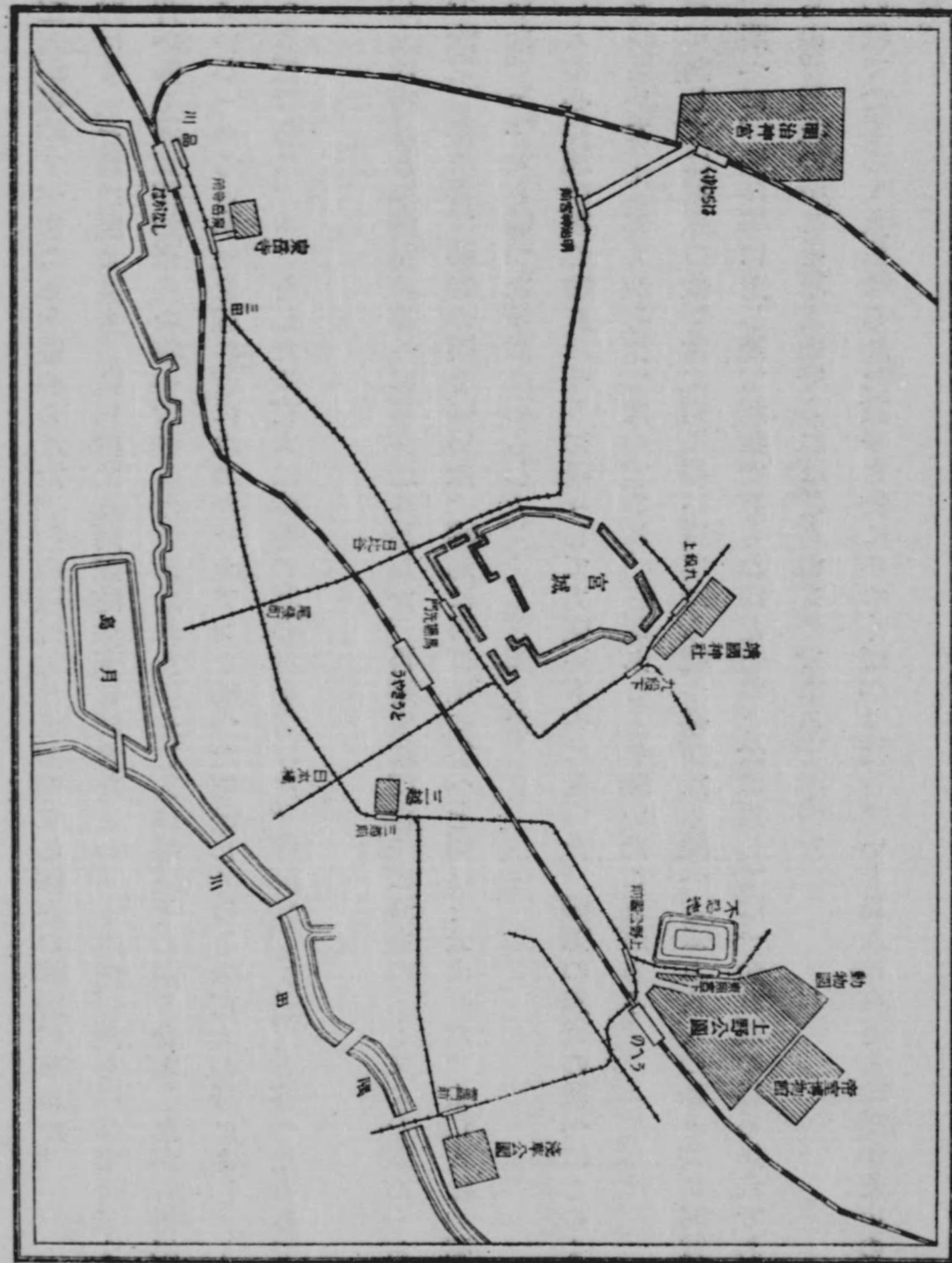
無我と書かれた掛軸にふと目が吸ひ付けられた。

總ての争ひ悩み悶えと云ふものは自分を對象とするから起るもので自己即ち我を捨てることに因り解消するものである。

私の強い人程無理を云ひ理屈を並べる。

盗人にも三分の理屈ありとは我を表示する爲の比喩に過ぎない。

妬み嫉み虚榮——人を卑下する、怨恨等々皆我より起る。我を殺す——即ち一步退いて冷靜となり公平なる第三者として判断する時餘りにも自分勝手な考へをしてゐることがわかる。昔或る金持の若



宮	靖	明	上	淺	三	泉
神	神	治	野	動	草	岳
社	宮	公	帝	物	公	寺
城	園	園	室	園	園	越
	博	博	博	博	博	博
	物	物	物	物	物	物
	館	館	館	館	館	館

線	省	市	省	市	地	市
省	市	省	市	地	市	地
市	省	市	省	市	地	市

下	下	下
---	---	---

名	線	電	鐵	鐵	電	電
鐵	線	電	鐵	鐵	電	電

下	東	招	原	明	上	上	雷	三	泉
車	京	魂	野	治	野	野	岳	岳	岳
驛	驛	社	宿	宮	園	園	寺	寺	寺
驛	驛	社	宿	園	園	園	前	前	前

き未亡人が再婚すべきことを勧められた。その理否を日頃信仰する禪師の禪師に尋ねた。

禪師曰く「それは私よりも日頃信仰する阿彌陀如來に聞きなさい——本堂の鐘を叩ひて合掌する時鐘の音が即ち阿彌陀如來のお答へである」と云はれた。未亡人は早速その通り合掌しながら再婚しても「よいか」わるいか」を鐘の音に求めた。カアンと鳴つた焦燥してゐる未亡人の耳によし／＼と聞へる様である。ホツとした未亡人は禪師に其の旨を告げた。禪師は「さうか」と答へたのみであつた。

未亡人は物足らぬ禪師の答へに再び迷ひ出した。再婚すれば亡夫に濟まぬ……又人の勧めもある。一人で決定し得ず再び禪師の門を叩いた。禪師は再び鐘に答へを開けと云はれた。未亡人は力強く鐘を叩いた。カアンと鳴つた餘韻はわるし／＼と聞えた。

未亡人の心の迷は霧の晴れたやうに晴々して力強いものになつた。禪師の無言の教へにこの未亡人が悟をひらいた——即ち我を捨てたのである、と云ふことを聞いたことがある。

私事に對しては勘忍の袋を常に肩に掛け繕びたら縫へ繕びたら縫へと云ふ古人の諺と共に同輩との争に、悶へに、惱み等に對し總て無我であらねばならぬ。公に對しては一念君國の爲め無我であらねばならぬ。無我の境こそ軍人の守らねばならぬものであると思つた。

世の總てのものゝ蒐集せられた數多き物に心ゆくばかり接したいと思ふけれども時間がないので引上げた。

百貨店三越

雑踏の數語に盡きる淺草を後にして三越の昇降機に乗つた。

人間生活に要する何物をも揃へた百貨店……流石帝都に誇る丈けあるものだ。

質素を旨とする吾々には餘りに桁違ひの場所ではあるけれども各階を一巡して見た。

食堂の前を通る頃誰か「食事しやうと云ふ。移心傳心一様にうなづいた……急に空腹を覺えたのである。

食堂の中に這入つて驚いた！ 洋食部である。出るに出不れず腰を降した。

洋食と云ふものは餘りたべたことはない。

何かの雑誌で見た常識の歌と云ふものを手帳に筆記してあるので餘り見苦しからざる様に濟したいと思ひながら一目通した。

常識の歌

一、知らぬこと知らぬと云ふは恥ならず知つたふりして知らるゝが恥

一、うっかりと他人の悪口云ふまいぞ差合のある事もあるもの

一、訪問は朝の早くと夜の遅く食事時間を殊に避くべし

- 一、儀式的訪問ならば殊更に合はずともよし相手の人に
- 一、挨拶がすめば用事を手みじかに餘談はそれが終りたる後
- 一、先方が多忙であればすぐに辭しさうでなくとも長居慎め
- 一、名刺にはいらぬ飾りはせぬがよし己が顔を汚すも同然
- 一、折り方は右で慶賀上は無事左上弔問左下告別
- 一、上揃へ中はゆがみて下ひらき下に飛した下駄のぬぎ様
- 一、右足は先づ脱いでから左をば脱ぐこそよけれ靴の脱ぎ様
- 一、左足先づはいてから右足をはくこそよけれ靴のはき様
- 一、上ッロ／＼中はバツタリ下二寸下に明け放しふすま戸障子
- 一、禮をして腰を上げるはいとおかし襟筋あけて見へるのも亦
- 一、長上又は婦人が先に手を出して求められたら握手するなり
- 一、握手には必ず右手よ左をば出すは右手に病あるとき
- 一、手袋のまゝで握手を求めたらこちらも手袋脱かてよろしき
- 一、手のひらを握る握手を知らずして指先握る人のおろかさ
- 一、長上には椅子をはなれて傍に立ち敬禮するが習なりけり
- 一、同輩は立ちて其儘禮をする目下にするは腰かけた儘

- 一、サアどうぞおかけなさいと勧められそれから後に腰かけよ椅子
- 一、長上のまだかけもせぬのに腰をかけ反身になるは共に失禮
- 一、我が敷いた布團や椅子に温まりあるを他人に出すは失禮
- 一、しとねをば二三度勧められそれを敷かぬは過ぎた遠慮
- 一、御順にと席を進むる其中で頑張つてゐる態のみにくさ。
- 一、床の間はあいさつ済んですぐに見よ歸りがけて見るは禮の知らぬ人
- 一、來客も主人も時計をばチヨイ／＼見るは無禮とぞ知れ
- 一、煙草盆客の方から灰吹きは右で火入は左なりけり
- 一、硯をば客の左に差出して心なしとて笑はれにけり
- 一、水引きは白を左に赤右に婚禮凶事は結び切りなり
- 一、吉事には端を切らずに巻くがよし凶事短かく切れや水引
- 一、婚禮の祝ひ物に包紙二枚水引をも亦二本なり
- 一、二つ折三つ折りて上多く下少し折れ祝儀包は
- 一、二つ折り三つに折りて下多く上少し折れ香典包は
- 一、なまくさと凶事には熨斗をつけぬもの、貰ひし方は紙入れぬもの
- 一、人招く知らせは凡そ七日程前に送りて答へ待つべし

- 一、招待を受けたる時は、怠らず早く諾否を答へるぞよき
- 一、招かれて行くと返事をした後に、差支へたるとき早くことわれ
- 一、招待に遅れて行くは失禮よ、さりとて餘り早過ぐるも亦
- 一、御馳走のあくる日禮に行くものぞ、行かれぬときは手紙にてよし
- 一、目上の人に盃さすは失禮よ、先づいたゞいてから返すものなり
- 一、うつむいて物を言はずにせかゞと、犬食するはいとも卑しき
- 一、まだ何かあるか知らんと碗中を、さぐり箸するかたちみにくさ
- 一、受けとりし汁のお代り膳におかず、其の儘吸ふは受吸ぞ忌め
- 一、口の中へ箸でギウ／＼押込むは、込む箸と言ひ避くるものなり
- 一、箸深く口でなめるはなめり箸みにくきものぞゆめなすな人
- 一、香の物湯の中に入れてかき廻す、廻す箸とていやしまるなれ
- 一、食卓に向ひて椅子にかけるとき、淺くかけたは見苦しきもの
- 一、ナフキンをあまりに上げるなよ、胸半分の下でひろげる
- 一、ナフキンはコーヒーすんで其の後に折らず疊ます食卓の上に
- 一、パンは手でちぎるべきもの、ナイフにて切るは作法を知らぬなりけり
- 一、肉はみな少さく切つてためて置き、ポツ／＼食ふは見る目いやしき

- 一、なかばにてナイフとフォーク置くときは皿の縁にぞかくべかりけり
- 一、皿の中ナイフとフォーク置くことはもう要らぬとの合圖なりけり
- 一、紹介は目上の人を呼びかけて、目下の人の名を告ぐるなり
- 一、四十二で初老で、六十一が還暦七十が古稀八十八米壽
- 一、光線を前から受ける机では故障起らん眼にも腦にも
- 一、新らしき疊は水で拭くものぞ、湯で拭くときはちきに赤くなる
- 一、あやまちて疊にインキこぼしなば石鹼に鹽つけ拭ふべし
- 一、米櫃を折々あけて日に乾かして冷して後に米を入れるべし
- 一、新らしき塗物の匂去らんには、腐りたる牛乳にひたせ半時間
- 一、眞鍮の色くもりたるときは糠味噌か、梅酢にみかけよ
- 一、靴を買ふは必ず夕べ、朝の内は足は小さくなつてゐるなり
- 一、遠路する前靴にグリセリン塗れば、足をも靴もいためず
- 一、日射病日かげに寝かせ、衣脱がせ頭を冷し醫者を待つべし
- 一、魚の骨のどに立ちしは生たまご、飲めば包んで抜いて行くなり
- 一、寝る時と起るときには手足をば、グット伸ばせば血の循環よし
- 一、温かき室から急にそとに出なば風引かぬ様深呼吸をせよ

- 一、砂糖湯はつかれ休めの妙薬ぞ、さりとして多く飲むるぞ夢
- 一、靴下に石鹼つけて乾かせば靴づれせぬぞ奇妙なりけり
- 一、フケ多き人はしやぼんで洗はずに、アルコールをば地にすりつけよ
- 一、横にのみこらず縦にもみがくべし裏をも忘るな齒をみがくとき
- 一、日の丸の旗は直径一尺二寸なら巾三尺縦二尺なり
- 一、活花が枯れかけたならアスピリン風薬をば少し與へよ
- 一、湯の中に味噌一つまみよくときて、上水早く澄むは不良ぞ
- 一、湯の中に醤油一滴たらしみて底で溶けるは良品と知れ
- 一、バター匙で培りてみよ泡立つは、良バターにして立たぬは悪しき
- 一、脛節は拍子木の様に叩き見よ音の冴へぬは悪い品なり
- 一、ヨチウムをば垂らして見よや白砂糖黒くなるは澱粉のため
- 一、卵から白き粉つくは新らしくツル／＼するは古きものなり
- 一、試験紙の青きを貼つて赤くなる鳥獸肉は良き肉と知れ
- 一、魚類は尾から頭へ逆まに撫で、ザラ／＼するは新らしきもの
- 一、蝦類と牡蠣にあたるは五六月七八月の卵産む頃
- 一、罐詰のふくれしものや穴二つあるは不良ぞ買ふまいぞゆめ

- 一、カステラー切る疱丁は暖めよスカリ／＼と刃切れよろしき
- 一、林檎買ふときは目方を調べ見よ、軽いのが駄目重いのがよし
- 一、腐つたバナナの毒はいとはげし、かまへて食ふな皮黒き品
- 一、牛乳を一滴爪にたらし見よ良き品ならば殊にかゞやく
- 一、ヨチウムを垂らして見よや牛乳に黒き沈澱之が澱粉
- 一、炭はねる時は生鹽一つまみ、火中に入れよすぐに止むなり
- 一、寝る姿勢仰臥第一次は右左枕は胃を弱くする
- 一、醤油に番茶を注いで日々に飲め醫者いらすして健康の素
- 一、眠れねば玉葱切つて枕許匂をかげすぐにスヤスヤ
- 一、蕪の根汁の匂を嗅ぐならば腦病治るこれが妙薬
- 一、南瓜は脂肪の消化助けつゝ不眠肝臓何れにも利く
- 一、トマト食へば肝臓病は治るなり續けて食へば色々よくなる
- 一、腎臓病渡菘草を食ふがよし水氣もとれて氣分晴ればれ
- 一、梅干は殺菌力の多ければ傳染病はよりもつかれず
- 一、火傷には油を塗るが第一よ醤油に鹽を溶りたのもよし
- 一、コロッブは粗末にするな黒焼が硝子の傷によくきく

- 一、餅などが咽喉につかへて苦しまばクシヤミをさせよすぐに飛び出す
 - 一、咽喉の潤く時に湯水を飲むならば酢少し入れよすぐ治る
 - 一、椎茸を煎じて蒸せば霜やけやヒマアカギレは三日惱ます
 - 一、心のある飯が出来たなら酒少しバラ／＼振りて長く蒸すべし
 - 一、小さかなは茶を少し入れ熱湯で煮れば骨まで柔くなる
 - 一、罐詰をあけたら直ちに鉢に入れ、其儘置は毒が出来るぞ
 - 一、馬鈴薯の赤い所は切つて捨て必ず芽をば食ふまいぞ毒
 - 一、釘の先油つけて打つときは堅い木とても曲らずに入る
 - 一、熱湯をコップに入れるは割れ易し、小匙を入れよそれで安全
 - 一、訪問は先づ服装は大切ぞ身分相應禮に缺くるな
 - 一、スープを皿の向ふの匙とりて匙の先から音立てずに吸ふ
 - 一、シヤンパンは儀式の酒よ何杯もおかわりするは禮知らぬ人
 - 一、蓋とるは先づ飯椀よ汁に平膳の左に重ねるがよし
 - 一、高ぶるな怯ちな馴れるな差出るな之ぞ禮儀の始めなりけり
- 軍人として餘り見苦しくなく済すことが出来た。

泉 岳 寺

香煙のたへる間とてない赤穂義士の墓に詣でた。

元祿の華美優柔の風漸く流れる頃當時に警鐘した警討……

主君淺野長矩の警吉良義央を討つた赤穂浪士大石良雄以下四十七人の義士の靈は靜かに地下に眠ることであらう。

冷靜水の如き大石——熱烈火の如き堀部——後者は前者を手緩しとして憤慨の極單獨に事を擧げやうとさへしたが若しことを擧げたらそれは或は失敗に終つたであらう？

冷靜可し熱烈亦あしからず——

大石の冷靜に過ぎた溫和のみにしてもことは困難であつたかも知れぬ？

原惣右衛門の中庸は冷靜と熱烈とを程よく取り計つて大願を成就したと聞く。

酒豪を思はせる赤垣の墓石には徳利さへ並んで居る。

僅か十六歳にして主君の警討に身を捧げた大石主税の墓——限りなき哀愁をそゝるものがある……

泉岳寺の名は赤穂義士の名と共に永劫不滅であらう……

賑かな帝都の電燈漸く光を増す頃品川から乗車した。

御製

時はかるうつはの針のともすれば
くるひやすきは人の世の中

卒業

號令臺の前へ整列した。

普通科砲術練習生卒業を命ぜられた時のうれしさ……例ふるに言葉なき有様である。六ヶ月苦樂を共にした同期の人々とも別れなければならない。

朝な夕な御訓育に全力を盡された教官——分隊長——教員とも御別れするのだ。
数々の教や御注意……身にしみる。

厳格な中にも住み慣れた學校とも御別れするのだ。

萬感胸に迫り思ふ様な御禮の言葉さへ出ない。丈夫で一生懸命やれ……激勵のお言葉を受けながら涙で頬を濡らすものがある。

只々盡忠報國を以てこの御恩の萬分の一でも報ゆるのだと深く心に誓った。

再び高等科に入校する事を思ひながら。

皆さん御機嫌やう……おからだを大切に……さ様なら友よ……再び逢ふ日を楽しみに……

家庭通信

父上様

母上様

御變はありませんか

六ヶ月間の教程も恙なく本日卒業を命ぜられました。

十一月一日一等兵に進級して腕章も今迄の錨の交叉した上に小さな櫻の花が付きました。

普通科砲術章と云ふ大砲を横にした腕章が左腕の方にも付きました。

記念に撮つた寫眞は寫眞屋から出來次第直接送つて呉れる筈ですからよく御覽になつて下さい。

今度愈々艦隊勤務の軍艦〇〇に配乗せられることとなります。

配置や分隊は乗艦してから委しく御知らせ致します。

日頃教訓を受けた教官——分隊長——教員の教を守り一意専心皇國の爲め御奉公を盡しますから御安心下さい。

追々寒さも加ることですから御からだを大切になさる様御祈り致します。

皆々様へも宜敷御傳へ下さる様御願致します。

結 び

海軍砲術の任

一、明歌々たる満月中空にかゝる時……旭日の光水平線に出づるとき……金波銀波を躍らす平和

の海

二、狂瀾逆巻く怒濤……船を覆し人を呑み尙止むなき大嵐の海。

三、大自然の巨大の神秘を包蔵する紺碧の海……渺茫果てしなき大洋を征服し西に東に航する時そこには新奇の異邦があり開化の列國が存在する。

四、亞爾亞の大陸を襲ふ狂瀾怒濤を物ともせぬ大防波堤。

千古萬古搖ぎなき緑深き島帝國日本。

五、海の偉大に接し世界の情勢を察し艦艦を浮べて日本の使命を護る重大なる海軍を想へば誰か血湧き肉躍らすに居られやう。

六、砲筒の火蓋一度切れた時……最後を決する砲術の任を想へば誰か勇み立ち振ひ立たずに居られやう。

吾等の抱負

東方帝國建國以來已に三千年。青史の照らす所、内に治亂興敗の時と共に運行せるものありと雖も外夷敵の侮を受けず、皇威澤々として四民を霑し國光隆々として八紘に輝く。彼の秀でゝは不二千秋の嶽となり、發しては萬葉爛漫の櫻となる所謂正大の氣、神人を通じて國土に鐘る。眞に宇宙の盛觀と謂ふべし。然れども更に熟ら勘考するに、盛者は必ず衰ふ強者豈必ずしも恒あらんや。

皇國九千萬の民を擁して今隆盛の榮光に包まると雖も時運の好謂は未だ遽かに逆睹し易しからざるものあり。洋は東西に涉り州は五大を震撼して國運を屍山血河の間に賭する這般の世界大戰亂も豈管に一盟一臂の上とのみ謂はんや、思へば我が皇國徒に過去の光榮に眩惑して惰眠を貪るの時は過ぎたり。猥りに戰勝の餘威に自負して飽食暖衣すべき秋は去れり。緊張の秋は今將に此の國土を見舞はんとす。有志豈手を空うして偷安すべけんや。我等生を此の國土に享けて二十有餘年。天地正大の氣を負ふて一臂君國の爲めに奉ぜんとす。朝夕青雲の志を抱いて營々之れ務むと雖も或は怖る、單身微力其の效の著しからざらんことを。然れども彼の渺茫たる大洋も一點滴の水より成れるが如く、吾が微力必ずしも積んで他日の大成を期し難しとせず。唯時は往昔と異なり、單騎先驅して刀槍に血塗り以て大功を一世に揚げんことは甚だ難しとする所、今志成りて良兵となり、微を積み大を致し忠君以て皇國に報んとするのみ、惟誠、惟實、之吾等の抱負。

普通科砲術練習生の入校から卒業迄(終)

第 分 隊 第 班

部	數	等	級	氏	名

11.12

昭和九年十一月十日印刷
昭和九年十一月十五日發行

定價金八拾錢

不許
複製

著者 橫須賀市小川町十三番地
工藤 德五郎

發行者兼 代表社員 權藤 貫造
印刷者 東京市牛込區早稻田町三十四番地
合名會社 双文館

